

日時:2020年11月8日(日) 13:00~14:30

場所:古川町公民館

戦国時代の城下町―飛騨の町づくりの特徴をさぐる―

講師:仁木^{に き}宏^{ひろし}氏(大阪市立大学教授)

はじめに

ただいま紹介いただきました大阪市立大学の仁木です。よろしくお願いします。ご紹介いただきました通り、私自身は中世都市を主に研究しています。時代としては15世紀から17世紀の初めくらいまでです。本職は文献史と言って古文書を扱いながら研究していますけれども、都市研究に関しては歴史地理学的な視点で色々なことを考えておりますし、考古学の成果や建築史学の成果も取り入れて研究をすすめてきております。この時代の都市がどういう風な機能をしていたのか、それから商業や流通のあり方がどうであるのかも絡めて考えております。今回の山城セミナーの中で城下町・都市を取り上げることになっておりますように、この時代の都市というのは前近代の社会ですので、権力(武士)の支配とどういうふうに関係しているのか、お城・城館とどういうふうに関係しているのかということを、これまであちこちで勉強させていただきました。京都や堺だけでなく、北陸の港町ですとか、宗教的な都市である寺内町や城下町、そういうものを見ております。基本的にフィールドワークが好きな人間ですのであちこちの都市にお邪魔して拝見しながら、都市の形であるとか、地形・地理はどうかということを勉強してきております。

全国的にはそういうことで研究し



ていますが、飛騨国に関しては初心者です。美濃国は内堀さんという岐阜市教育委員会の方に教わりながら勉強させてもらった記憶がありますので、尾張・美濃についてはそこそこ分かるようになってきたのですが、飛騨についてはここ数年仕事を頼まれる中で通うようになりました。午前中見学いただいた小鷹利城のようなお城はそれなりに見せてもらったのですが、その下の城下空間については、実は古川の町を少し歩いただけで初歩の人間です。講演の用意をするなかで飛騨の町づくりの特徴を論じるには今回少し早すぎたかなと思います。そうは言いましてこういう機会を頂きましたので一生懸命準備はさせていただきましたし、お話をさせていただこうと思います。

そうした中で、参考文献に上げておきましたけれども飛騨市教育委員会の大下さんが最近、「飛騨北部における武家拠点周辺地域の構造と変遷―姉小路・江馬から金森へ―」という論文を書かれました。私が編集して来年出る予定の本に書いていただいたご論文ですが、図版がとてもよくできているので本が出る前で申し訳ないのですが、全面的に今回使わせていただきました。会場のスライドにも大下さんが作られた都市図を映し出しています。これらは本邦初公開ということで、飛騨市の資料にも載せていないということですが、この図があることによって今回お話できるということでご容赦いただきたいと思います。戦国時代から金森の時代までの飛騨市域のお城だけではなく城下空間がどういふふうな形をしているかということ、大下さんの研究成果を借りながらお話をするということでご理解いただければと思います。よろしくお願いします。

1 中世都市のかたち

私がこれまで見歩いてまいりました中で、どんなふうに中世の都市が発展・展開していったかを順番にみていきたいと思います。だいたい全国的な展開をみていきますが、今日の話には京都や鎌倉のような大都市は入っておりませんので、あくまで地方都市の展開ということで考えていただければと思います。どうしてこういう話をするかと言いますと、あとで話します飛騨における町づくりと共通していたり、あるいは飛騨の城下町の発生を導いていくような様々な特徴が含まれていると考えているからです。ここではそうした特徴を先に紹介することで飛騨の武家拠点と都市について考えるための基礎知識を理解していただきたいと思います。

まず、中世には市場が日本各地にあったということをご存知かと思います。市場は毎日開いているものではなくて、「三さん斎さい市」や「六ろく斎さい市」というように月に3日や6日間だけ開いているものでした。市場空間に定住している商人がいるわけではなくて、別のところ

から商人がやってきて、市が立っている日だけ店を開くという状況です。有名な『一遍上人絵伝』という鎌倉時代後半ごろに描かれた画像には、「市小屋」とよばれる小屋で備前焼の大甕^{おおがめ}や反物等が売られている状況が分かります。別の場面では市場が開かれていない時は市小屋になにもいなくて、乞食さんが横で犬が喧嘩しているのを五月蠅い^{うるさい}と怒ってはる状況や一遍さんたちがお祈りしている様子が描かれています。市が開かれる時だけたくさんの人が集まって交易的な空間が生まれるという状況が、鎌倉時代から南北朝時代までの一般的な交易的空間のあり方で、市がこの時代の都市的な空間と言えるのではないかというふうに考えられております。越後国の奥山庄(新潟県胎内市)というところの絵図には「七日市」や「高野市」という市の空間が荘園の縁辺部に描かれています。地頭や百姓の屋敷と違い、市の空間は一直線の道路の両側に家々が立ち並んでいるという特徴が分かると思います。『一遍上人絵伝』でも道路空間の両側に市小屋が建っているということが分かると思いますが、このような形が市場の基本的な形と考えられております。やがて市に定住する人が出てくるわけですが、商人が住むわけではなくてむしろお寺や神社、場合によっては武家の居館・城郭の近くに市ができてくることが多くなってきます。これは市を収入源とするとか、市の平和を守るとかそういうふうな機能を果たすものがあって市が安定的に経営できるということだと思いますが、宗教勢力や武家の近くに市が開かれるという段階が次に現れてくると考えられております。これを市^{いちまち}町の段階というふうに呼ぶ研究者もおります。

こうした市とは全く違った形で、私はお寺というものを日本中世の町のあり方として強調する主張をしております。お寺といっても天台や真言のほか浄土宗といったもので、戦国時代に流行る仏教ではなくいわゆる旧仏教が多いです。お寺には勿論お坊さんがいるのですが、それだけではなくてお坊さんにお仕えしている俗人の人たちの方が構成員としては多いんですね。それ以外にお寺のために物を作る職人さんですとか、場合によっては職人さんが外に行って物を売るような商人になるということがあり、そういう人達が一つのコミュニティ・人間集団を作っていくと考えられています。それからお寺の多くは「菩提寺」「氏寺」ということで近隣の武士や有力農民の子供が入ることが多いんですね。長男は家を継ぐ必要があるのですが、中世社会では次男・三男が氏寺に入ることでお寺を経営し、実家の菩提を弔うということが多くなりました。このようなお寺というものは堂舎と附属建物からなるわけですが、ものづくりの空間や近隣の有力者が結集しているという意味で都市的空間と言って良いのではないかと考えられています。それが拡大したものが宗教都市で、「一^{いつさん}山寺院」といわれることもあり、私は「山の寺」と呼んでいます。多数の院・

坊が建ち並ぶものです。残念ながら飛騨には宗教都市と呼べるほど大きなものは無いようですが、全国的には例えば和歌山県の根来寺^{ね ごろじ}があります。お寺の発掘調査では高い石垣技術が確認されています。それから地下式の蔵のようなものが発見され、ものづくりの拠点として機能していたことが分かっております。それから福井県勝山市には平泉寺^{へいせんじ}という宗教都市があったことが分かっております。こちらでも発掘調査や地名の調査がされております。この広い寺院の境内の一部に工房があったり、周縁部に市場があったりするということが分かっております。白山平泉寺はご存じの通り、白山に登っていく参詣道の一つ越前馬場の入口地点にあたります。白山神社の境内だけではなく、その周縁部に北谷・南谷といった巨大な宗教空間が広がっていたことが分かっております。この中は坊・院といった宗教施設なのですが、それらは職人を抱えていて巨大なものづくりの場所であったことが分かります。また、道路に向かって間口を一定にしていた坊・院が続いている形で設計されていることが分かっておりますし、一乗谷^{いちじょうだに}の城下町に先行して町づくりをしていることが分かっておりますので、周辺部に影響を与えたのではないかということも言われています。あとは発掘調査で膨大な銭や中国・東南アジアの陶磁器が出土しております。また、鉄滓^{てつさい}も見つかったことから、工房があり、高い技術力があったようです。宗教都市は他にも沢山あります。滋賀県多賀町の敏満寺^{びんまんじ}というのも、山の上の丘陵上の高いところを坊院群が立地しております。丘陵下には今は「敏満寺」という集落があるのですが、山の上のお坊さんを支える俗人たちが居住していたのではないかと考えています。こういう山の上と下で支配者集団とそれに仕える百姓を中心とする居住空間が広がっているというのが特徴的かと思います。それから同時代に描かれた長命寺^{ちようめいじ}（滋賀県近江八幡市）の参詣曼荼羅^{まんだら}を見ますと、琵琶湖岸に沢山船が浮かんでいまして、町場的な空間が描かれています。琵琶湖対岸から渡ってきた人が参詣するために港に着いて、門前にはお参りする人を目当てにしたような町場空間が広がっているということも表現されています。ですから、こうした宗教的な空間とそれとともなう町が一体化して一つの巨大な宗教都市を形成しているという事例かなと思います。ちなみに今の長命寺の地図を見ますと、山の中はほぼ同じような様相が残っていますし、門前の様子も今でも良く残っています。

これまで見てきたような宗教都市は真言・天台といった旧仏教系でしたが、一方で浄土真宗の寺内町も良く知られています。今回は大坂本願寺の寺内町を紹介したいと思います。大坂の上町台地の先端部分に巨大な寺内町が形成されたと考えられています。中心には勿論本願寺がありました。様々な復原研究をしていく中で本願寺に仕える

お坊さんたちの屋敷であるとか、周りには防御のための堀や巨大な城壁が築かれていたり、櫓があつたりというような様相が分かっています。またお寺に直接附属する「寺内之浦」と呼ばれる港があつて、そこには中国に渡る唐からふね船が入港した記録もあります。最後は織田信長によって攻められ、追い出されるわけですが、信長がいくら攻めても落とせなかった大坂本願寺の寺内町がありました。こういう巨大な宗教都市というものも日本の中世の特徴的な町づくり・都市のあり方と言えると思います。

次は港町です。こちらでも江戸時代以降と違ひまして、寺社が港町の部分部分を担当し、寺院・境内の連続・集積によって成り立っていました。港町を形成する宗派はこれまでの宗教都市と毛色が異なり、日蓮宗であつたり真宗であつたりする場合があります。そして両側町・短冊型地割という特徴がしばしば現れてきます。広島県の草戸千軒くさど せんげんという遺跡で発掘調査が行われ、山沿いにあるお寺が港町の領主であり、その門前に広がる中州・三角洲が草戸千軒町のもとと言われています。調査が重ねられ、何段階かに分かれて把握されていますが、14世紀頃には短冊型地割の街並みが続いていたと想定されています。広島県立博物館(福山市)には町の実物大の空間がイメージとして作られています。ここには市小屋のような売り場があつたり、職人さんの工房があつたり、船着き場があつたりと港町の様相が想定復元されています。それから島根県益田市には中須湊という遺跡があつてこちらでも発掘調査がされています。道の両側には町か市場の空間が想定され、船着き場も想定されています。船着き場が近いあたりには工房があつたりします。船着き場・工房を伴う町場空間が広がっていたと発掘調査によって想定されています。

こうした中で、今日はこの後に金森氏を中心として両側町や長方形街区を見ていくこととなりますが、どうもこうした港町の中にそれに先行するものが現れると考えております。香川県にある引田湊ひけた(東かがわ市)では、砂堆という巨大な砂の丘陵上に町が発達していきます。先ほども中州というところもありましたが、どうもそのような所に町場ができるパターンが多いです。砂山ですので、一番高いところに道路が通ってそれを中心に町が広がっていくということが確認されます。引田の場合は一番高いところにマチ(オカ)と呼ばれるところがありまして、浜側にハマという地区が広がっています。別の地図によると中心部がマチと呼ばれる空間で、ハマと呼ばれるところに何本かの街路が通っていることが確認されます。これはまさに長方形街区と短冊型地割です。引田の場合、近世以降のものなのか、中世まで遡るものかは分からないのですが、砂堆の上に広がる町が、町づくりの出発点なのかもしれないと思い紹介しました。同じような事例が福井県小浜で

も確認できます。小浜は南から伸びてくる砂堆と、北から伸びてくる砂堆がありましてそこらは西津と呼ばれていますが、なかなか複雑な構造です。南側の小浜を見てみると、砂堆の一番高いところを伸びていく道が基本なんですけれども、それと平行に何本かの道が通っております。それが長方形街区を形成する町づくりとなっております。道路両側には家々が建ち並ぶ両側町・短冊型地割となっております。小浜の場合は発達した港町ですから、縦断する道だけでなくそれを繋ぐ何々小路というような町もいっぱいできあがってきます。さらに日蓮宗・浄土真宗の寺内町的な空間も絡まっています。なかなか複雑ですが背骨にあたる長い町筋が通っているというのが特徴的かと思います。さらに小浜の場合は中世の最終段階に若狭武田氏が入ってまいりまして、山の麓には居館ができ、後ろには後瀬山城のちせ やまじょうというかなり大きな山城ができてきます。小浜は元々港町だったものが、武家が入ってきて戦国大名が城下町として乗っ取っていくという、典型的な面白い町の展開をしております。

最後に城下町です。これは中世では最先端の町づくりをしている存在です。中心になる城郭・城館があって一族や家臣の屋敷があります。城下町も最初期のものは「守護所しゅご」しよとよばれる段階のもので、だいたい16世紀前半ごろまでのものですが、武士たちだけが集まって一つの町を作っています。ところが16世紀後半になってまいりますと寺院が附属するようになって、それぞれが都市の中心部にできたり周縁部にできたりします。さらに店舗や職人の作業所ができ両側町が形成されてくる。そうした城下町の周縁部に市町や港町が立地する場合も出てきます。土佐国の田村(高知県南国市)というところはこの基本的な形で、守護館の前に家臣団と職人と思われる区画が見え、武家だけがいる守護所的な空間として始まります。次に岐阜です。最初に革手というところに守護の土岐氏が拠点を置くようになります。それがやがて福光ふくみつというところに移っていくわけです。革手の場合は木曾川沿いに港町があってもおかしくないと思うのですが、武家の居館が建ち並んでいるまさに守護所的な空間であつただろうと思います。長良川対岸の福光に移っていきますと、鷺山城そうふくじと崇福寺や福光城といった武家の空間もあるのですが、内堀さんの復原によりますと街道がクロスするところや長良川の渡しのところには小さな町場ができはじめていたのではと考えておられます。ここから武士についても町場的な空間が見えるようになってくるという想定です。それから阿波国の勝瑞しょうずいは細川氏や三好氏の拠点です。発掘調査が進んでいまして、三好の居館周辺の他にブロック状に区画されている町場がありまして、こちらは高く安定した地盤の上に乗っています。ただし、それぞれの地区の性格付けは難しいのです。それから、吉野川からつづく運河の水沿いのとこ

ろには少しか町屋的な空間が想定されています。復元図によると高台のブロック状のところは家臣団屋敷なのかなと思います。そして勝瑞館を中心とする川沿いの支配空間と町屋空間があります。こういったものが揃ってくると我々が想像する江戸時代の城下町に近づいてきます。しかしこの大きな特徴はバラバラということです。江戸時代の城下町のようにきれいに整っているわけではなくて、あっち向いたりこっち向いたり、いろんなものが混じりあっているのがこの時代の特徴かと思います。

次に能登の所^{ところくち}口、今の七尾です。所口という港に畠山氏が守護館を近接して置いてきたと考えられる事例です。もともと港町があるところはそれを利用しようと近くに武家が拠点を置くという場合がよくあるパターンかと思います。

次は、島根県益田です。益田川上流部には七尾城というお城がありまして、その下に城下空間があることが想定されています。お城があつて、家臣団屋敷があつて、上市・中市・下市という一本街村状の両側町の城下空間が想定されています。さらに益田川の対岸にも益田氏の菩提寺が想定されています。こうして山城と川を挟んだ兩岸に武家が空間を形成して、家臣団の空間・寺院空間があつて、市場空間が道路両側に広がっているという、これもよくある城下町のあり方かと思います。

最後に朝倉氏の一乗谷を見ていきたいと思います。一乗谷は朝倉館を中心として、一乗谷川の両側に広がっている町で上城戸^{かみきど}と下城戸という遮蔽物によって閉じられた城下町だと理解されます。ここの特徴は幹線道路から何本か横向きに道路が伸びましてその道路沿いにお寺や職人さんやお医者さんの居住空間が広がっていることです。幹線道路沿いには短冊型地割が続いておりますので、こういうところはもしかしたらお店が広がっていたのかもしれませんが。現在、復元建物地区には山沿いに中級クラスの家臣団屋敷が並んでいまして、道路を挟んだ反対側には武家屋敷ではない人の居住地区が広がっており、一つの地区の中に複数の性格の家々が建っているのが、戦国時代の特徴かと思います。そうは言いましても、流石は朝倉の最終段階の城下町ということで一乗谷は非常に立派な町だと言えます。最近注目されているのは下城戸を出て北側^{あす}の足羽川^{わがわ}沿いに安波賀^{あばか}ですここ数年発掘調査を行っていますが、港が確認されています。県立の朝倉氏遺跡資料館があるあたりに港があつたということが発掘で分かってまいりました。港の突堤あるいは堤防か議論があるようですが、そういうふうな遺構が発見されています。広大な面積の中に石積みの遺構が確認されています。一乗谷というのは城戸の内だけではなく、その外側の足羽川沿いに北陸道に繋がっている港町も附属して持っていたというのが特徴的かと思います。

2 飛騨北部における武家拠点と「都市」形成

ここまで全国的な中世の町づくりについて見てまいりました。この後は今のようなことを参考にして、飛騨北部における武家の拠点や都市の形成のあり方をどのように考えるとよいかお話したいと思います。今我々がいるのが増島のあたりですが、その少し北側にある岡前ですとか増島の対岸にある古川、このあたりが古川盆地の町々になります。本日は行きました小鷹利や向小島あたりは残念ながら町場的なものが確認できませんので今回の話からは抜いております。もう一つは江馬氏の拠点の中心地ですね。このあたりをとりあげたいと思います。最後に、集大成として高山があります。こちらに近世の拠点が移ってまいりますので、それについても見ていきたいとおもいます。

まず古川盆地です。現在の古川の美しい町並みは基本的に増島城の城下町として形成されたものだろうと考えられます。その南側には増島に先行して存在した古川城が立地しています。それから姉小路はいくつかの家に分かれていますけれども特定の家のある段階の拠点として岡前・小島というものも見ていきたいと思います。拠点の変遷案も資料3頁のように大下さんが作っていますのでご参照ください。

まずは岡前です。今はこういう字を書きますが、本来は「御構^{おかまえ}」という字で、それが訛ったものだと思います。偉い武士のお屋敷という意味合いかと思います。200m×160mくらいの大きさを持った、屋敷内に段差のある広がりとなっています。近辺に杉崎廃寺といった古代寺院もありますし、おそらく姉小路が入る以前の有力武士の拠点であったのではないかと大下さんは考えています。そこに姉小路が14世紀に入ってくるということです。資料3頁に図を載せています。図に示された集落は近代初頭のものですが、少なくとも近世や場合によっては戦国まで遡ると思います。岡前館の周りには明確な集落が存在しない、館だけ独立したようなそういう形となっています。守護所のなかで言えば先ほど紹介した土佐の田村の館に近いと思います。館があつて北側に集落はあるのですが、あまり城下的なものをもたないあり方かと思います。

次に古川ですが、古川氏の拠点で後に三木氏がそれをのっとしていくわけです。古川駅の南の方に古川城というお城があります。古川城の宮川対岸に古町という小字がありまして、このあたりは古川城が機能していた段階の城下的な空間なのではないかと想定がされています。あとは家臣団の居住地をどこに求めるかということですが、上町という地区もありますが、あまり城下的な空間が発達しているようには見えないと思います。ただ、古町という表現は気になります。何に対しての古いかということですが、大下さんに尋ね

ると増島に対しての古町ではないかという言い方をされていました。いずれにしろある段階にはここに町的な場所があったのではないかということかと思います。先ほどの話で市場的な空間の話をしてしましたが、町場は河岸段丘上なのでもう少し川の近くにそういった場所があって、その上に町場的な空間があったかもしれません。注意しながらもう少し検討を進めていかなければならない場所だと思います。しかし、川の対岸に町場的なものがあったかもしれないという想定はとても面白い場所だと思います。

次に江馬の方にいきます。高原諏訪城というかなり立派な山城がありましてその下に江馬氏の下館があります。下館に関しては現地に復元がされていますので皆様良くご存じかと思いますが、上級武士の邸宅としてかなり進化した状況を示しています。資料5頁の図をご覧くださいと思います。整備された館空間があり、それとは別にお寺が山沿いに展開しています。ただ、あまり大きな町場はなくて、お寺空間を埋める形で明治時代には民家が点在しているといった状況です。あるいはひとつ河岸段丘が下がったところに集落が想定されているのですが、あまり明確な城下空間を形成しているようには見えません。ただ、かなり整備された武家の空間があって恐らく江馬氏に関連するだろうと思われる宗教施設が山沿いに並ぶというのは、戦国初期の空間のあり方として典型的なパターンと言えるのではないかと思います。

次は古川盆地に戻りまして、小島という地区です。小島城という戦国期の山城があり、その下(北側)に小島氏の山下^{さんげ}の居館の伝承地であるとか、お寺や周辺集落がある程度想定されています。現在の古川の町筋から少し北西に行った山際に小島の地区が広がっています。小島城の北側に小島氏の城下空間が広がっていたと考えられています。資料6頁に図があります。明確に居館がここだということは言えないかと思いますが、寿楽寺周辺に戦國小島氏の城下的な空間が想定されています。もう一つは杉崎という地区があり、ここはなかなか解釈がむずかしいのですが、真宗のお寺が端に立地しています。集落が結構大きくてきれいに直線状・格子状に町筋ができています。さきほど紹介した阿波国勝瑞^{にしかつち}の西勝地の様相に似ている気がしないでもないです。それから岐阜の守護所にもこういう空間が見えますので必ずしも近世までは下がらないと思います。大下さんは真宗寺院と道路の向きが違うという見解を出されていますが、一応今回はこの地区は中世に遡ると考えたいと思います。山城があって、山の下のだこかに小島氏の居館が合って、城下的な空間が広がっている、小島氏の最終段階のありようが確認できます。

さらに江馬の船津というところを見ていきたいと思います。江馬の下館の北西に東町というところがあります。ここにやがて金森氏の城郭が築かれますが、江馬氏段階から城

郭化がされていたと想定されています。川の対岸に船津という複雑な町があります。それなりの広がりをもった町で越中に繋がっていく街道が町の中を複雑に通っております。お寺が町筋の中の両端を押さえるようなところに位置し、〇〇町・〇〇町といった地名があります。これもあとで紹介する金森の段階にかなり改変を受けているのかもしれませんが、私は古いかもしれないとも考えています。船津という地名も気になり、「船渡」にしては流れが速すぎるかなという気がします、むしろ船津があってそれに引き付けられる形で東町に移ってきたと考えられないかと思っています。そういう船津の卓越性や先進性が言える可能性はないだろうかと考えているところです。江馬の拠点と川の対岸にある別の存在としての都市的な空間が、やがてできてくる金森の城下町という関係性の中で船津というものが解いていける、そういう面白い要素を持っているというふうに見ています。

3 織豊系城下町の革新

いくつか駆け足で戦国段階、金森が入ってくる前の段階の状況を見ました。この後、飛騨に金森氏が入ってくるわけなんですけれども、もう一度全国に視点を戻しまして、それに先行する織田や豊臣の町づくりの特徴について見ていきたいと思います。織田信長は尾張国小牧に入って革新的な町づくりをしますが、その前は尾張国清須にいます。清須は惣構に囲まれた居館といくつかの家臣団屋敷があって、市場が北側と南側にあります。清須はどこにでもあるような戦国時代の中規模な城下町でしかなかったんですが、突然変異を小牧で起こします。山城もすごいものを作るんですが、城下も特徴があります。直線的な道路が4本あり、その両側に短冊型地割が続いております。関連して一本だけの両側町ではなくて複数の両側町が重なることで長方形街区ができるんだという、前川要さんという方の説があります。つまり、道の両側に家々が建ち並ぶ両側町が二本平行すると、間に長方形の街区ができるんですね。実際は江戸時代みたいに家がびつりと建ち並んでいるわけではなくて、道路に面して家が建ち並んでいて裏には蔵があるだけで背割りの用水路が通っているという状況です。なんの変哲もない空間ですが、実は小牧ではじめて城下空間として編み出されたと考えられています。信長に関してはこの直前の清須までは全然こんな町づくりをしていなかったですし、戦国時代の城下町にはこんなものは見られません。例えば朝倉の一乗谷でも長方形街区は姿も形もありませんので、信長オリジナルで作った先端的な町づくりの手法だと思います。あえて言えば北陸方面の砂堆上にできた港町にはこういうものがあると紹介しました。

次に信長が移っていく岐阜です。地籍図を見ますと、もともと斎藤道三の段階で二筋

の道路が作られたと考えられておりますが、信長の段階で真ん中の道を入れて三本にすることで長方形街区を成立させたと考えられています。北の方の街区はいつの段階か確定するのは難しいと思います。南の方も新しい可能性があります。確実なのは東西方向の道を真ん中に一本追加で通すことで長方形街区を完成させたのではないかとということです。

さらに近江国安土(滋賀県近江八幡市)です。安土は地形が複雑でして、微高地と低湿地に分かれています。三本メインの筋が微高地を通ることで安土の中心部分を構成しています。こういう三本のメインルートというのが安土ぐらいから明確になってきます。岐阜の場合も三本目の真ん中を入れたという話でしたが、安土の場合は先に真ん中の道があって両側に信長が城下町を作ったのではと考えられています。

番外編で近江国長浜ですが、こちらは秀吉が安土と近い時代に整備した町です。今見える完成形がどの段階で秀吉段階がどうだったか不明ではあるのですが、南北方向の街道筋とは別に、お城に向かって何本かの道が繋がっています。小牧に近く、あるいは発展形と言えるかと思いますが、秀吉の初期段階の町づくりのあり方として見られます。

ここでヴィスタという話をしておきたいと思います。ヴィスタというのは城下町の空間からどういうふうにお城が見えるか、あるいはお城の見え方を考えながら城下町空間を作っているというお話です。例として示す場所は土佐国岡豊^{おこう}(高知県南国市)というところです。岡豊城という山城がありまして、岡豊新町という城下空間が広がっています。実際に岡豊新町に行きまして城を見ますと現在は田んぼになっていますが、両側に町が広がり、延長線上にヴィスタが効いておりまして真ん中に岡豊城が見えるという景観が今でも確認できます。町の視線の先にお城の本丸や天守閣を置くというのが織田の末期から豊臣段階の一つのトレンドとして確認できるだろうということです。それがかなり意識的にされたのが大坂です。大坂は最終的に広がるのですが、最初、羽柴(豊臣)秀吉は西側の三本の街道筋と南側の四本の街道筋で城下町を作りはじめました。西の方は港町的なものをとりこんで、南町は四天王寺という宗教空間をとりこむためのものだろうと思いますけれども、やはり三本・四本という街道筋によって城下町を広げております。北側の三本は北浜・天満橋というまさに現在の大阪の中心部で町づくりがされています。その後徳川にも踏襲されますが高麗橋通とか島町通とか町筋の先に秀吉段階の天守が位置する、ヴィスタが効いているということが分かっています。それは南側の城下町も同じだと思います。お城を中心に町づくりをするという、秀吉段階の方法だと思います。大坂城下町

は最終的には巨大化してしまうので最初の三本四本が分かりにくくなっていますが、淀川左岸の自然堤防上にあったり、上町台地の高いところに街道があったりするわけです。あとは北側の天満というところに、当時紀州にいた浄土真宗の顕如さんと呼び寄せまして、天満の本願寺、寺内町をつくらせるということも秀吉はやっております。

このように、信長・秀吉の城下町は巨大な城郭や広大な家臣団屋敷があって、それが町屋地区とは明確に区別がされるような方向がとられています。町屋は並行する直線道路三本や四本がセットになって基軸になっている。その組み合わせによって長方形街区と短冊型地割が形成され、その組み合わせや重層によって城下町が拡大していく。さらに豊臣でも後期以降は地形を克服するために砂地や低湿地を埋め立てて広大な城下町を作って見せる。それによって権力の大きさを見せつけるというような都市づくりがされています。

4 金森氏の城下町の構造

今申し上げたような信長・秀吉の町づくりを、実は金森氏がかかなり意識して飛騨の地でも踏襲しているというお話を最後にしたいと思います。まず東町ですが、元々下館という古い段階の江馬氏の居館があって、性格は不明ながら船津というところがありました。東町にも江馬氏は前線基地か新しい拠点置いていたことは間違いないと思うんですが、金森の段階にも東町に新しい段階の城を築くということです。城があって、川沿いの低地の河岸段丘から一段上がったところに上町という武家推定地あったと想定しています。さらに低位の河岸段丘の下には中町・町尻という町屋が想定されています。江馬氏の段階と切り分けるのは難しいのですが、お城・家臣団屋敷、低地に町屋というのは良くある豊臣期段階の町づくりのパターンですので、基本的に現在残っている形は金森が作ったのではないかというふうに考えています。その段階の船津をどう考えるか。直線道路が通っていますので、これは金森段階の新しい町づくりの可能性もあるのではないのかなと思いますが、その辺はまだわかりません。船津のまちの方が先行しているのは間違いないと思いますが、金森の段階で何か手を入れているのかどうか。お城があって家臣団屋敷があって附属する町場があって、独立する町も一角に組み込んでいくという豊臣段階の大名がよく行う町づくりがされたのがこの東町の城下空間であると言えるのかなと思います。

次は小島で、先ほど見た北側ではなくて南側に今度は注目します。小島城そのものも金森段階の改修が確認されているようです。区画整理で現地では良く分かりませ

んが、ここの面白いところは地籍図を見ますと南側に「一番町」「二番町」「三番町」といういかにも整った町がありましたよというような地名が残っていました。そうしたものの最先端に「柳御所」という一画がある。これはもしかしたらヴィスタが当たっているかもしれませんが、おそらく金森氏の段階では小島城は維持されていると思いますが、もしここを押さえるために入るのであれば、柳御所の方かなと思います。あとは杉崎の方格地割をどう考えるのか、推定では家臣団居住区という想定で色が塗られていると思いますが、お城があつて家臣団居住地があつて町屋があるというのは非常にきれいな形ですが、ここを家臣団居住区と推定して良いかはまだよく分からないといったところです。なお、南側の町は本格的な整備がされる前に増島に移ったと想定がされていて、田んぼとして残ったようですが、三本の道路によって形成されるきれいな長方形街区の形がよく見えます。

そして、古川の町並みを形成している増島です。今も一部残る増島城、二之丸・三ノ丸という拠点がありまして、それから現在の古川駅の南部に家臣団屋敷が想定されています。今の古い町筋は「壺之町」「式之町」「三之町」という三本のラインによって城下のメインの空間が形成されている、これはさきほどの小島やこれから紹介する高山も同じです。金森氏の特徴的な町づくりなのだと思います。あとは大事なポイントに真宗のお寺を置いています。これは比較的好くあるパターンかなと思います。

そしてこれらの集大成が高山かなと思います。まず高山城がありまして、二之丸・三ノ丸とあり巨大な平山城です。そのまわりを取り囲むように広大な家臣団屋敷があります。メインの城下町空間は「一ノ町」「二ノ町」「三ノ町」という三本の町筋が通っていることが分かります。そしてその周辺に「扶持人地」とありますが、下級の家臣団屋敷があつて縁辺部にお寺があるという比較的好くある近世城下町のパターンかなと思います。お城があつて上級の武家屋敷地があつて、町屋があつて下級家臣団屋敷があつてそれらをとりまくようにお寺がある、そこだけみると割とどこにでもある近世城下町ですが、この「一ノ町」「二ノ町」「三ノ町」という名称を含めて宮川沿いの作り方に小島・増島と共通するところがありますので、ここに金森氏のこだわりがあつたんだろうということが明確に確認できるのではないかなと思います。ですから、この高山の城下町を考える際には増島、場合によっては小島との連関性の中で考える必要があるかなと思います。もちろん高山がこの地域では最も大きくて近世に続いていく城下町に成長するわけですが、前提として他の城下町の町づくりとの関連性も十分に考えながら見ていく必要があるかなと思います。

ここまでをまとめていきたいと思います。姉小路氏やそこから分かれた家々の段階がありました。そのあとの三木氏の段階では町づくりに関してはあまり変わらなかったのですが、金森氏が入ってくると全く町のあり方が変わってしまったことはご理解いただけたかなと思います。城郭・家臣団屋敷が巨大化していく。様々な形の工夫も見え、例えば今日はヴィスタの話をしましたけれども、最近の発掘調査で分かったのは山城の石垣がどうも町や街道から見える方向にだけ意識的に積まれているのではないかということです。「見える城」「見せる城」というものはそれ以前から無かったわけではないですが、強調するようになったのは豊臣期(金森期)段階以降の特徴かなと思います。それから何より面白いのは、平行する三本の道路のセットですね。これをすごく金森さんはこだわってはみたいです。そのこだわりのもとは、最初は小牧で、三本が確定するのが岐阜以降、安土も大坂の西の方も三本の道なんですね。三本ということにどこまでの合理性があるか分からないですが。また、三本も真ん中がメインで両側がサブということではなく、金森さんの場合は1・2・3という順番になっていますので、その番号に重要性を発揮したいのかなと思います。いずれにせよ、三本の道による長方形街区と短冊形地割のセットというのが、金森さんのメインの城下町空間の作り方として言えるんだろうと思います。これもあって城下町全体の巨大化・計画性がみえます。また大事なことは地形を克服するという意識が見えることです。例えば、東町で言えば川沿いの一番低位の河岸段丘のところはそうかなと思いますし、小島も最終的に町として成立しなかったのは湿田であまりに地形環境が悪すぎたのかなというふうに思います。しかし地形環境を克服してでも町をつくるぞ、というところに意味があったのでしょう。東町は豊臣の城下町のあり方としては、古手というかオーソドックスな形です。それに対して三本セットという小島・増島・高山の発展性というものはなかなか面白いですし、金森さんの町づくりのこだわりがよく表れていると言えます。増島と高山だけなら現在もあるので「ああそうかな」という程度ですが、今回の小島によって、明らかに意識的に三本セットで長方形街区と短冊型地割のセットを作ろうとしているなということが分かります。金森氏は当時秀吉の大坂がそうであったのと同じような最先端の城郭・城下町づくりのあり方を飛驒に導入したと言えるでしょう。

5 おわりに

室町・戦国といった古い時代は、古川盆地に存在した姉小路三家の拠点と、独立した江馬の拠点がありましたが、それぞれ少し違いがあります。江馬氏拠点のお寺は禅宗が多いですが、古川盆地は真宗が多かったりするわけです。共通点も結構あるかなと思います。

ます。街道をかなり意識しているということ、河岸段丘の段差といった地形を利用しているということもそうです。それから基本的に平地城館と山城がセットになっていると思います。一般的には平地城館が日常的な支配・生活の拠点で、山城が籠城する場所と言われてきましたが、午前中に登った小鷹利なんかは山の上で生活しているらしい遺物が出てますというお話を聞きましたし、本当に両方が同時に維持され続けていたのかというのはよく分からなくなりつつあるかと思います。あとはお寺が重要な立地に置かれているということです。それから塊^{かたまり}状の集落と書きましたが、室町・戦国時代の飛騨の在地勢力の武家拠点は、長方形街区はもちろん短冊型地割だとか両側町もほぼ確認できない、ということも特徴なのかなと思います。

それが金森の段階になると「豊臣大名マニュアル」と呼ばれますが、中央の革新的な町づくりのあり方を飛騨に突然のように持ち込んだと言えるかと思います。巨大な城郭や広大な家臣団屋敷、そして短冊型地割と長方形街区のセットによる町場の拡張が行われるようになりました。そうした中でも、小島や船津といったもともとあった都市的な場に近接するように町づくりを行うところもあれば、おそらくそれ以前はそういったものが無かったところを本格的に開発した場所もあります。高山がそうかは分かりませんが、増島はそうです。このような違いはありますが全体として革新性・マニュアル性、金森さんが何にこだわってはるかというのはある程度見えてくるのかなと思います。

最後に今後の課題です。今日のお話は日本全国から見て飛騨のありかたというのはよく似てますよということや、金森は当時最先端の町づくりを導入しました、というお話でした。確かにそういう話はひとつ押さえておく必要はあるかと思います。でも、次のタイミングとして大事なものは、そうはいっても飛騨独自はどこなのかということです。一見するとどこにでもある町づくりをしている、秀吉の方法を取り入れているに過ぎないと見えるんだけど、実は間違いなく飛騨独自のあり方があったんだろうと思います。例えば市場ですが、話を聞くとどうも市場は無さそうだということですが、無いんだとしたらそれに代わる機能はどうだったんだろうかと思います。古川や江馬の船津は若干気になりますが、物を交換する交易の場は飛騨ではどこにあってどういう形状だったのかということは考えていく必要があります。それから武家の勢力に先行する宗教勢力のあり方です。飛騨では平泉寺のような巨大な宗教都市は無いわけなんですけれども、もともとは顕密の天台・真言が入ってやがて禅宗も入って、最後は真宗が入ってくるわけですね。さらに真宗寺院が集落の重要部分に立地しております。このようなあり方をどのように考えるのか。もちろん武家の拠点とその周辺地域、武家の拠点と山城の関

係についても考えていく必要があります。金森氏が入ってくる以前の飛騨固有の拠点の独自性を解明していく必要があります。また、金森氏が入ってきたら全部中央流になるかという、必ずしもそうではないと思います。金森氏の町づくりを支えた飛騨的な特性は何かを追究していく必要があろうと思います。

それから、今回は都市について注目しましたが、飛騨一国レベルで考えていく必要があると思います。交通路に関連した町づくりをしているとお話しましたが、交通・流通というものが16世紀の後半あたりでどのように展開していたのかという関連を見ていく必要があると思います。他の地域では16世紀前半から後半にかけて爆発的に流通が活発します。特に海運はそうです。飛騨山中の交通がどうなのか分かりませんが、そういう物の動きと町づくりの関係は見ていく必要があると思います。もう一つは最終的には古川盆地ではなく、高山が飛騨の中心になっていくわけですが、この理由がどこにあるのかということです。なかなか難しいですが恐らく古い時代、この地域は越中側を向いて様々な物や情報が入ってきていたのかと思います。それが京都・大坂・江戸が中心になっていく中でむしろ美濃の側に出ていく交通路が中心となったあたりが、もしかしたら古川地区ではなく高山地区が中心になった理由なのかなと考えています。それも含めて交通や流通の展開を見ていく必要があるかと思います。それからなかなか難しいのですが、村々と武士の関わりも重要です。在地の武士たちが根拠を置いているのは各村々の百姓、加えてこの地域では林業生産者だと思いますので、そういう人達とどのような関係を取り結んでいたのかということ、さらには全体を通して見て飛騨国にとって、時代が中世から近世に変わったということをどういうふうに評価するのか、そのことに繋がっていくような話だと思います。

私自身、飛騨市で姉小路氏と江馬氏の城館跡の調査に関わらせていただいております。今回勉強させていただいてこの地域の面白さ、一見するとどこにでもありそうな中ちゅうさんかん山間地域の武家拠点のあり方なのですが、やはり詳細に見ていくと飛騨独自のあり方があって、金森氏のような外から来た人が作った町にもきっと飛騨の独自性が現れていると思います。そういったことを今後とも勉強していきたいと思いますし、調査に協力していきたいと考えております。皆さまも様々な形で今後、飛騨市教育委員会の調査をお助けいただく機会も多いと思います。そのために今日のお話が少しでも役に立てばと思います。どうもご清聴ありがとうございました。

飛騨山城セミナー第4弾

2020.11.8

戦国時代の城下町

－飛騨の町づくりの特徴をさぐる－

仁木 宏（大阪市立大学）

自己紹介

中世都市の研究～かたち、機能、商業・流通

都市と権力 都市と城郭

京都、堺、港町、宗教都市、城下町；近畿地方を中心に全国へ
フィールドワーク → 都市のかたち、地形・地理に興味

▼参考文献 仁木 宏編『戦国・織豊期の地域社会と城下町』

（戎光祥出版、2021年刊行予定）所収

大下 永「飛騨北部における武家拠点周辺地域の構造と変遷

－姉小路・江馬から金森へ－」

*このレジメの図版の原図掲載

1. 中世都市のかたち

(1) 市場（市庭）

市の開催日；外からやってきた商人が見世（店）を開く

市の開催されない日；人がいない

川の近く ←商品の搬入、積み出し

(2) 市町

定住する人がいる施設（群）の近くで市が開かれる

寺院・神社 武家館（城郭）

両側町へ

(3) 寺院；天台・真言、禅宗、浄土宗

僧侶（坊主）、下仕えの俗人、職人、商人

菩提寺、氏寺；近隣の武士・有力農民の子弟が入る

堂舎と付属建物 → 初期的な「都市」

(4) 宗教都市

一部に両側町

(5) 港町

荷揚げ場、倉庫群

(6) 城下町

市町や港町が外縁部に立地する場合も

2. 飛騨北部における武家拠点と「都市」形成

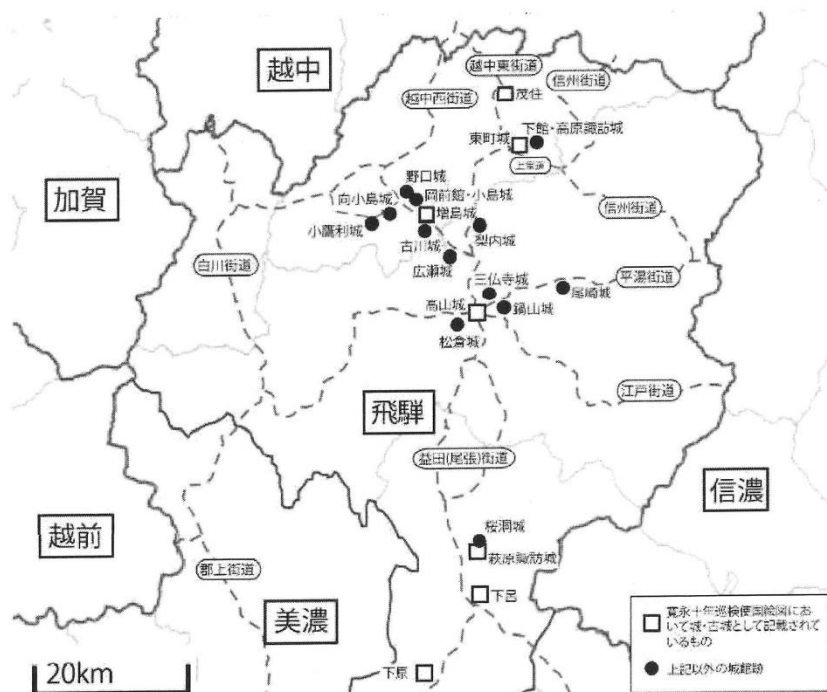


図 1 各拠点の位置

配布資料

図 11 飛驒北部における拠点変遷案

(1) 岡前館

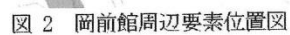
岡前＝おかまえ＝御構

200 m × 160 m 段差あり

杉崎廃寺 有力武士の拠点 → 14世紀、姉小路氏が入る

集落 街道

※規模の大きな居館が独立して存在



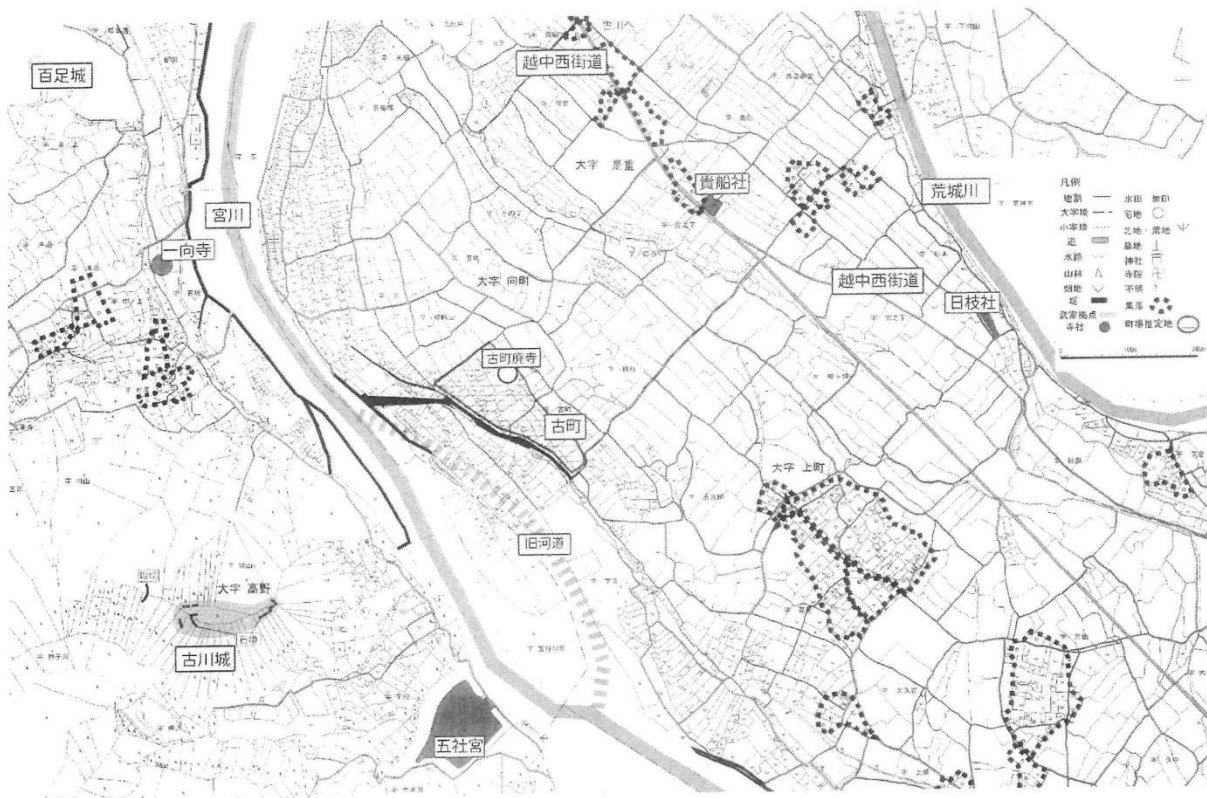
(2) 古川

古川城；古川氏、三木氏、金森期

大字「向町」の「古町」；宮川旧河道に隣接、金森期まで町場が存在？

大字「上町」

図 4 古川城周辺要素位置図



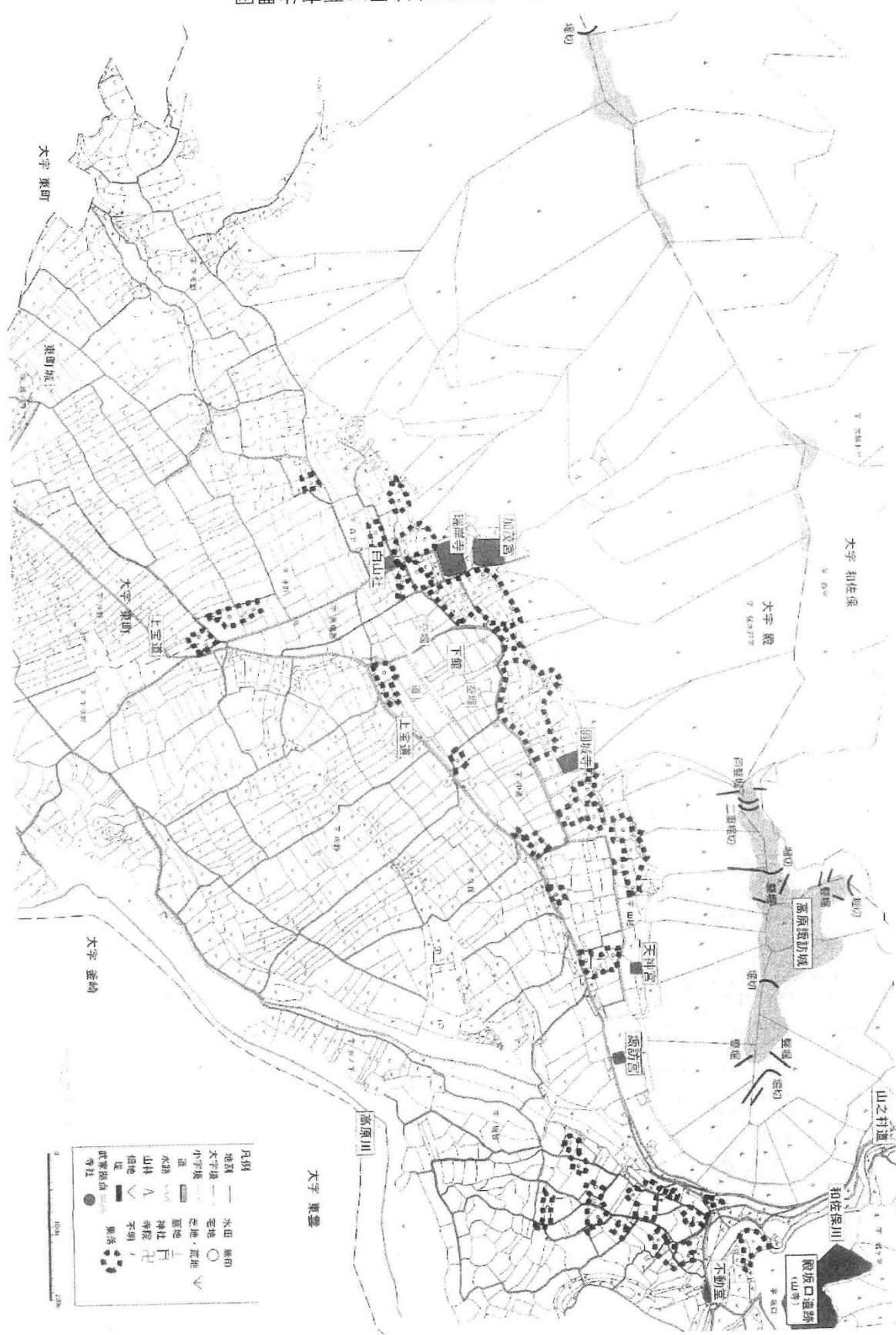
(3) 江馬・下館

高原諏訪城

江馬氏の下館；進化した上級武士邸宅

寺社が山麓の要地に分布

図 7 下館・高原諏訪城周辺要素位置図



(4) 小島（太江地区、杉崎地区）

戦国期小島城；山城

太江地区

「十楽館」（小島氏の山下の居館）伝承

寿楽寺・白山社と周辺集落

杉崎地区

真宗寺院

※武家拠点との関係？

「十楽館」 「柳御所」 小島城（山城）

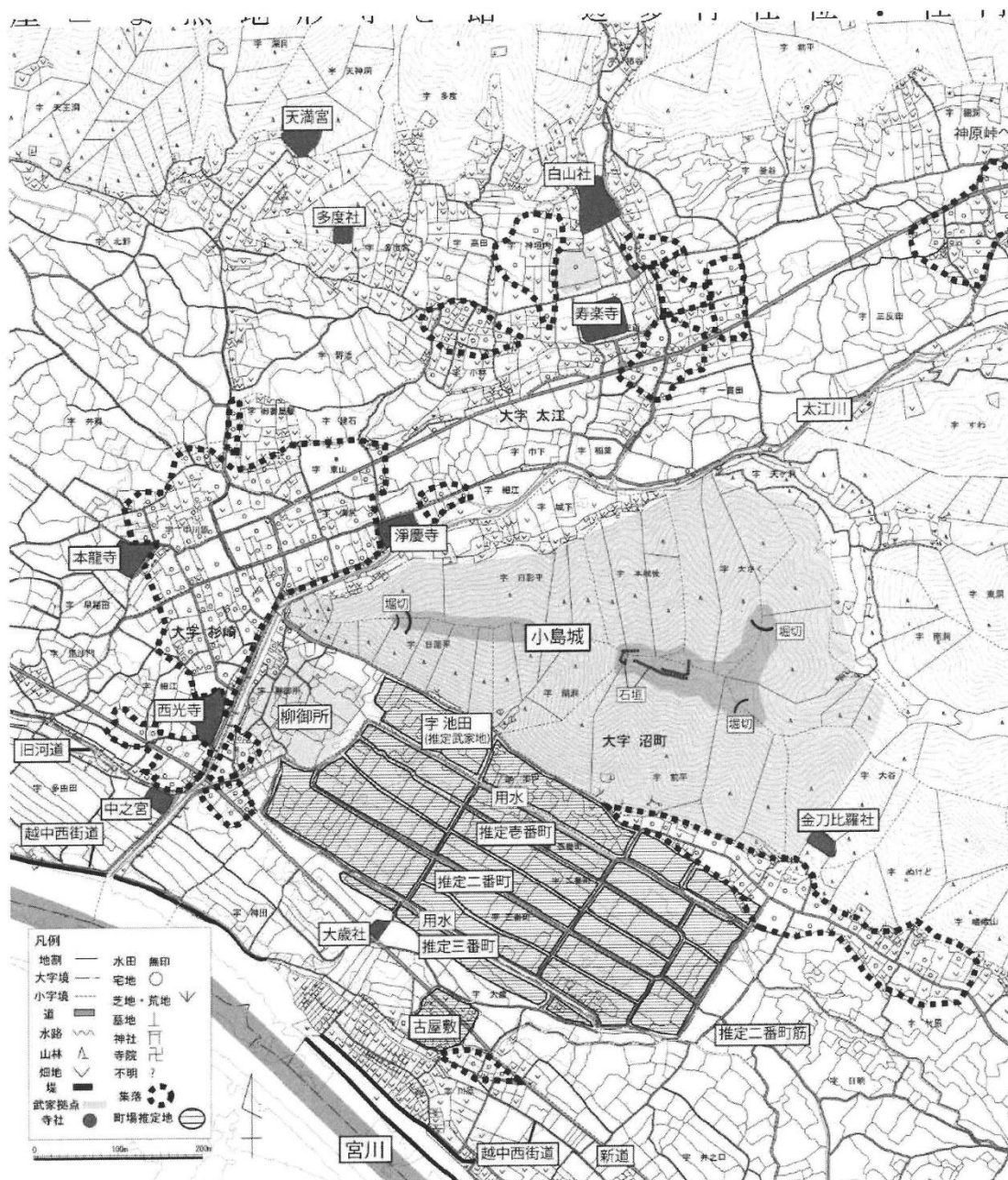


図 3 小島城周辺要素位置図

(5) 江馬・船津

本町（主軸）、仲町、西町、西里町、堀川町、相生町
 越中東街道、同西街道
 禅宗寺院
 東町城；江馬氏段階から

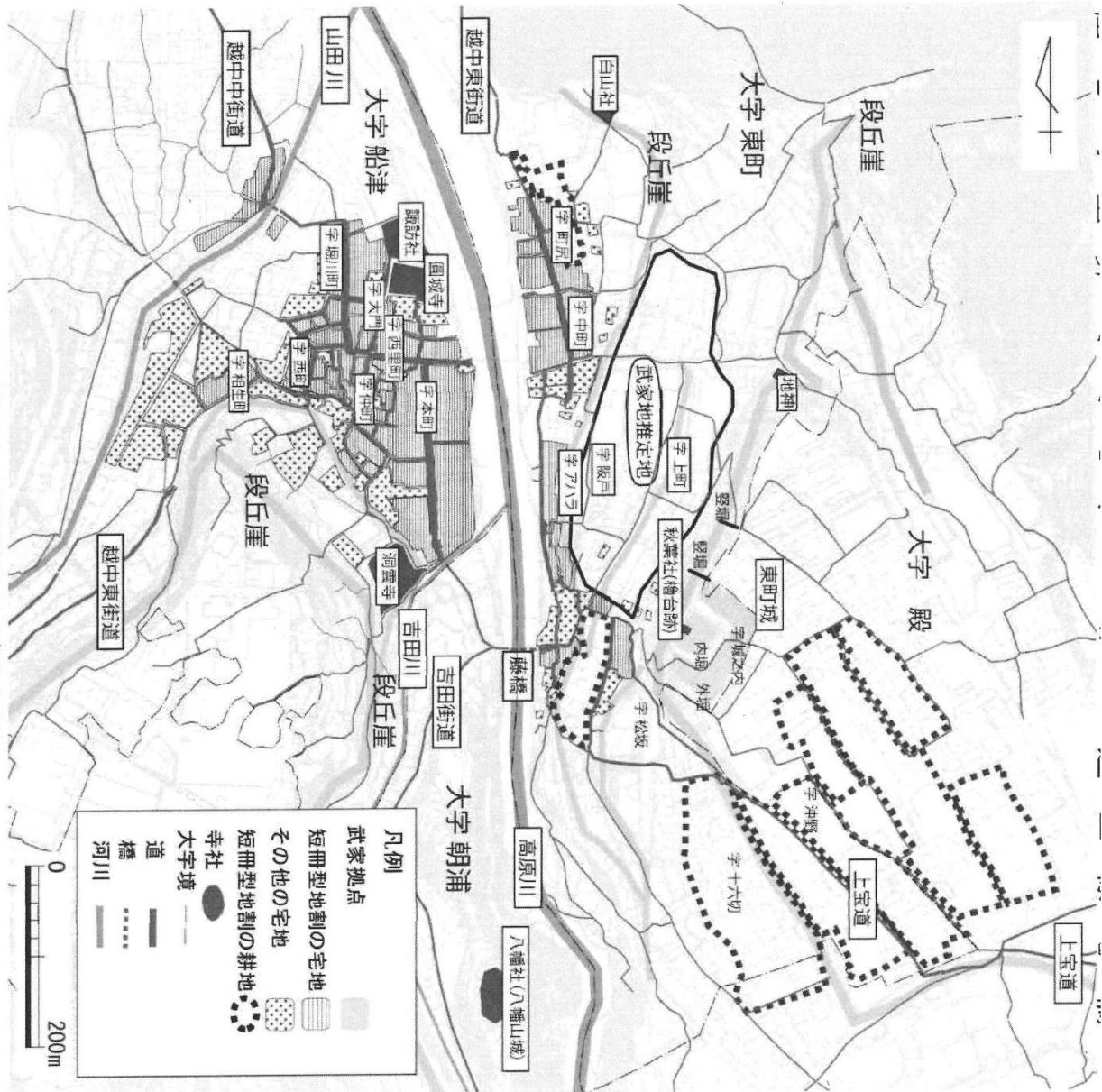


図 10 東町城周辺要素位置図

3. 織豊系城下町の革新

- (1) 尾張国小牧〔愛知県小牧市〕
平山城 と 平野部の城下
長方形街区と短冊型地割の〈セット〉
- (2) 美濃国岐阜〔岐阜県岐阜市〕
斎藤道三の城下町を織田信長が継承・発展
先行する港町（井口）を包摂
〈セット〉の広がり、複雑化
- (3) 近江国安土〔滋賀県近江八幡市〕
3本の並行する直線による〈セット〉が基軸
広大な家臣団屋敷地区
港町 街道沿いの町
- (4) 摂津国大坂〔大阪府大阪市〕
最初；並行する直線道路による〈セット〉が基軸
西方向（3本） ヴィスタの先に大坂城
南方向（4本） 寺町が付属
家臣団居住区と町屋地区の明確な区分
面としての広がり（船場）
本願寺の天満寺内町

■特徴

- ・ 巨大な城郭、広大な家臣団屋敷 町屋地区とは区別が進む
- ・ 並行する直線道路（3本）による〈セット〉が基軸
→ その組み合わせ、重層によって城下町の拡大化
- ・ 豊臣後期以降、地形克服～砂地・低湿地などを埋め立てて広大な城下町に

4. 金森氏の城下町の構造

- (1) 江馬・東町
東町城；金森期に拡張
上町＝家臣団屋敷推定地
中町、町尻
※城、武家地、町人地の配置。街道をとりこむ 対岸の船津も
→ 「古いタイプの」織豊系城下町

(2) 小島（杉崎・沼町地区）

壺番町、二番町、三番町

長方形街区と短冊型地割の<セット>

杉崎地区 方格地割の集落

家臣団屋敷地区？

初期的な短冊地割？

「柳御所」；山下の城郭

山城ではなく、こちらが政治的中枢？

←壺番町のヴィスタの先

山城（小島城）の石垣や櫓台を「見せる」

(3) 増島

増島城；巨大、平地城郭

広大な家臣団屋敷地区

壺之町 貳之町 三之町

禅宗・真宗寺院の計画的配置

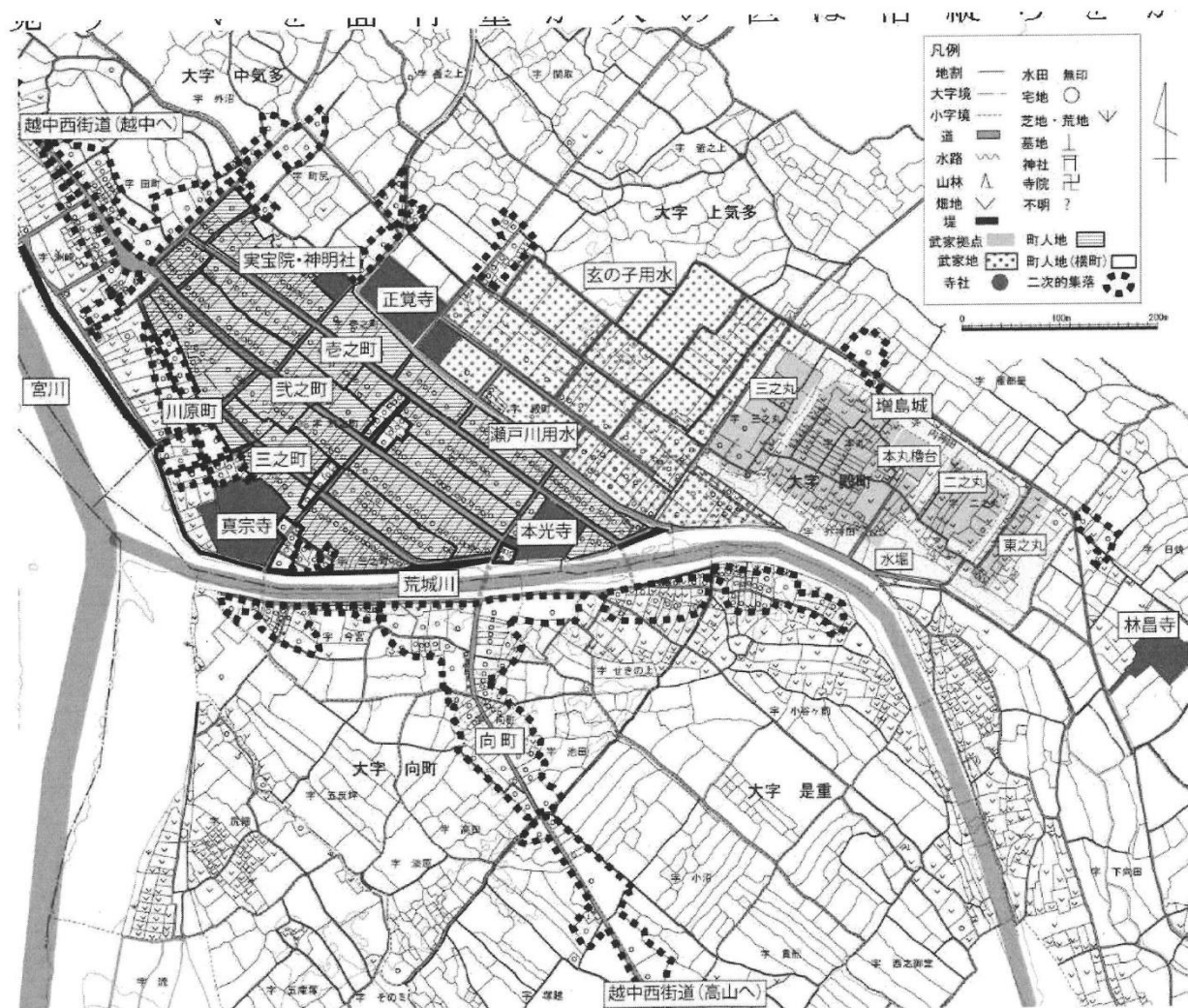


図 9 増島城周辺要素位置図

(4) 高山

高山城；巨大な平山城

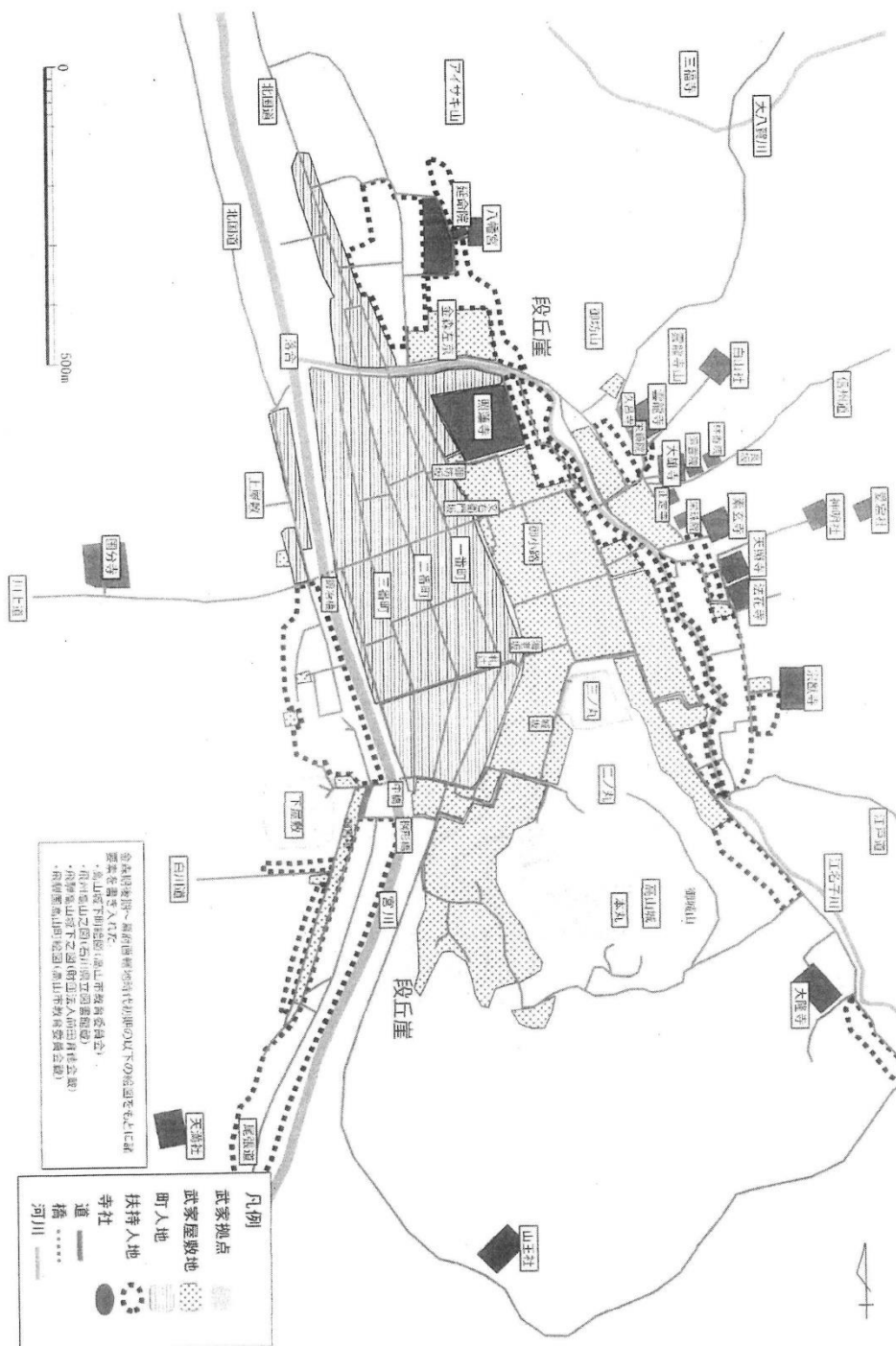
広大な家臣団屋敷地区；河岸段丘上

一番町 二番町 三番町

一番町のヴィスタの先に城郭

広がりをもつ「寺町」

图 8 高山城周边要素位置图



■まとめ

- ・城郭や家臣団屋敷地区の巨大化
 - ・「見せる」工夫 ヴィスタ
 - ・並行する道路（3本）による〈セット〉
 - ・城下町の巨大化、計画性 地形の克服を示す
 - ・小島 → 増島 → 高山の発展性
- ★金森氏権力が当時、最先端の城郭・城下町のあり方を飛騨へ導入した

おわりに

■飛騨の町づくりの特徴

室町・戦国期の武家拠点

古川盆地の複数の武家拠点

独立した盆地の江馬氏の拠点

街道 河岸段丘の利用

平地城館と山城

寺社の立地；重要ポイント

塊状の集落

金森期の革新性

城郭の整備 広大な家臣団屋敷地区

短冊型地割

〈セット〉による町場の拡張

中世「都市」と近接する金森期の城下町

小島 江馬の船津・東町

■今後の課題

飛騨独自の中世的な拠点発展を検証

市場、寺院（宗教勢力）

真宗寺院が集落の重要部分に立地

武家の拠点とその周辺地域 武家の拠点と山城

*織豊系（金森氏）以前の独自性を解明する必要がある

織豊系（金森氏）の町づくりを基礎から支えた飛騨の特性は？

飛騨一国レベルでの分析

交通・流通の展開と町づくりの関係

どうして古川盆地（国府地区）ではなく、高山が中心地となったのか

村々の変貌 飛騨国にとっての近世とは？